

いわがみ

令和七年九月 第百二号

中世の越後の人たちも大勢、この寺に物故縁者の供養を依頼していて、その名簿が残っている。高野聖（ひじり）と呼ばれた僧が各地を勧進して回ったらしい。その名簿の中に、シバタのミツマ、中ノ目の水間、荒川の三瀬、さらには中ノ目の三瀬出羽守が出てくる。すべて三瀬氏のことだ。

本紙の執筆を長く担当していた小林弘さん

は、連載最終回の令和二年七月発行第81号に、この高野山文書の水間氏と新発田市中ノ目にある水間出羽守の碑文についての考察を載せ、そのあと、私にメールをよこした。

そこには、三瀬氏が新発田の中ノ目に居たのは明らかだから、新発田市荒川にあつた荒川城が三瀬氏の城で、上関城はちがうのではないか、という根本的な疑問が書いてあつた。

確かに、米沢藩士となつた三瀬家の家系書には、越後での居城は荒川城だと書いてあつて、上関や関の字は全く出てこない。しかし、『関川村史』だけでなく村発行の各図書は、三瀬氏の城は上関城だと、さも自明のことのように扱つている。

高野山文書の謎、小林弘さんの疑問

弘法大師が今も生きて居られるとされているあの高野山に、清淨心院という寺がある。越後にかかわり深い宿坊のよう、万延元（一八六〇）年、伊勢・金毘羅参りの上関村孫三郎一行は、ここに宿泊している。

- ◆ 村の景観と歴史・人物（21）
- ◆ 民具が語る生活史（民具㉙ツエ）
- ◆ 方言一考（やつきり）
- ◆ モノいうもの（ピッケル）
- ◆ 歴史館行事の報告・お知らせ

上関城主三瀬氏の謎①

- ◆ 三瀬氏は、本当に
- ◆ 上関城主だったのか？

渡辺伸栄



高野山奥の院に巡礼姿二つ 2013年3月

細々と証拠探し、江戸時代の書物へ

小林さんからのプレッシャーもあって、その後も細々と証拠を探してきた。最近になつてそ

しかし、そもそも桂の関への赴任そのものについての根拠史料などどこにも示されていないのだから、小林さんが、三瀬氏上関城主説を疑うのも、もっともといえばもつともなのだ。さて困った。小林さんの言う通りなら、上関城の歴史が根本から覆る。これは大変と、小林さんの連載に続く私の連載初回（本紙第82号）に、取り急ぎ反論を載せた。

三瀬氏の所領は広く坂町や中ノ目、そのほか各所にあつた（『色部史料』『県史資料編』他）。守護代官としての三瀬氏の管轄範囲は下越一帯に広がり、居城は上関城でも、中ノ目に管轄拠点があつてもおかしくはないのだ。

とは言つてみたものの、肝心の荒川城が上関城である直接的な証拠は提示できなかつた。

れらしきものが見つかって、本紙前号で紹介したのが昭和三年発行の書物。しかし、これも残念なことに、最後の城主三瀬左近助の時代から三百三十年も経つた現代の本。その上、出典もなければ、左近を右近と間違えていて、証拠としては少々弱い。

江戸時代の書物『越後野志』にならがあるのではないかと期待はしていた。著者は水原町の小田島允武（のぶたけ）という書籍商。越後の自然・地理・産物等々あらゆる知識を網羅した地誌書で、文化十二（一八一五）年に完成、全二十巻の労大作。県立図書館でデジタル化されていて、家に居ながらパソコンで読むことができる。

だが、大作でしかも紙の本のようにバラバラとめくるわけにはいかず、本紙前号の時点では、証拠を見つけることができなかつた。それが最近、ようやく見つけた。第十六巻に越後の古城が列記してあって、そこに上関城の記述があった。「上関駅の山足丘に在りて番城也 水間左近 城代と為し居守す」と。

意味はこうなる。「上関宿の山裾の丘にある番城で、水間左近が城代として守備のため居城にしていた」。番城というのは、持ち主が他にいて家臣に番をさせる城のことで、番につくのが城代。前回紹介したように、上関城は上杉景勝に没収され、左近助は一度解雇後の再雇用。父

の城上関城の主に復帰したとはいえ、形の上で持ちは景勝でその城代とみなされていたことになる。

『越後野志』は、昭和三年の本より百十三年も古い。とはいえ、左近助の時代からは二百十七年も後になる。同時代史料というわけにはいかない。

ただ、大里峠開削が大永元（一五二二）年とされている根拠は、享和元（一八〇一）年出版の『米沢里人談』という書物で、これも二百八十一年も後になる。（『越佐史料』から）

どちらの書物も、江戸時代に地元に伝えられてきた話を収集・記録したもの。大里峠の開削は、米沢の人々にとって越後との交通が格段に便利になつた話だから、ずっと伝えられて来る。

上関城は、左近助が小国へ移つてから廃城になつたが、それ以前は、三瀬氏及びその家来衆と上関村の人々は濃密にかかわつて暮らしてきたはず。だから、二百年とはいえ、伝えられてきた話の信ぴょう性は高い。

『越後野志』も単なる聞き取りではなく、そのような記録文書などを収集して整理したもの。だから、どちらの証拠もかなり確實性は高いとみてよい。

ということで、三瀬左近助が上関城に居たことは、まず確定としてよいだろう。

荒川城は上関城

なんと私の本棚の中にもう一つ証拠があつた。何気なくバラバラとめくっていた『近世関川郷史料二』その二五五頁、赤谷村の「慶長二年

（より）領属記録」という表題の新野家文書。

慶長二（一五九七）年から明治五（一八七二）年までの領主が記録されている。代々の水原代官の氏名もあつて、村広報紙八月号で取り上げた大草太郎左衛門の名もここにあつた。

赤谷村のその文書の冒頭には、慶長二年の領主が書いてある。越後全体の領主として高田城の長尾越後守景勝、それに続けて、岩船・北蒲原郡内の城と城主名が列記されている。その中に「上関村 平山城 番城也 水野間左近」とある。何故か水野間となつているが、三瀬左近助のことだ。つまり、景勝が会津に移封された前年の慶長二年には、三瀬左近助が上関城にいたことが記録されている。

慶長二年時の岩船・北蒲原の大小の城と城主がすべてきちんと記録されているので、おそらく、その元となつた文書などがあつたのだろう。

『越後野志』も単なる聞き取りではなく、そのような記録文書などを収集して整理したもの。だから、どちらの証拠もかなり確實性は高いとみてよい。

になる。

以上で、高野山文書から始まつた疑問に、どうにか答えることができた。あれから早や五年、小林さんはお元気だらうか。

民具が語る生活史 ㉙ツエ(杖)

8月の美術館巡りでは屋根の改修工事を終えた羽黒山五重塔を訪れました。駐車場から五重塔までは徒歩での移動です。参加者の方には「必要な方は杖・ストック等お持ちください」とお伝えしました。健康登山や古道歩きの参加者にはおなじみのアイテムですが、美術館巡りで要項に書いたのは初めてだつたかもしません。

ツエは、「物の運搬時や、老人・盲人などが支えに用いる棒。徒步が中心の時代には旅の必需品だった」(P. 356『日本民具辞典』)とされています。ドイツ語では「ストック」、英語では「スティック」です。ステッキと聞くと英國紳士が想像されますが、護身用としての機能もあつたようですね。確かにイギリス人探偵のホームズは日本格闘術^{☆1}「バリツ」を習得しており、敵と戦う際にはステッキを武器として使用します。

民具としてのツエの解説は「：信仰に関わる登山では金剛杖(こんごうじょう・こんごうづえ)などと称した。：杖は歩行を助ける日常的な用具であるが、同時に神聖なもの、呪力を持

つものと考えられていた」(P. 356『日本民具辞典』)と続きます。『図説民俗探訪事典』には、「：稚児行列の杖、山伏の金剛杖、僧の錫杖、祭りでつかう^{☆2}卯杖(うづえ)などは、神の依代(よりしろ)とされた」(P. 24-25)とあります。

では、「金剛杖」とは一体どのようなものでし

ょうか。大阪や佐渡の金剛山、高野山金剛峯寺のように、金剛という名前は山や寺名、山号などに多く使われています。金剛石はダイヤモンドを指しますが、原義は「最も硬い石」です。性質が堅固で壊れないでの、最上・最勝の意味に使用され、特に密教の言葉に用いられるようになりました。例えば密教である真言宗や天台宗では金剛杵(こんごうしょ)という法具が用いられます。金剛杵はもともと古代インドの武

器で、後に密教で煩惱を打ち破る象徴として用いられるようになりました。形状により独鈷杵(ひとりしょ：両端が尖つた短い棒状のもの)、三鈷杵(さんこしょ)・五鈷杵(ごこしょ)などが

あります。飯豊の魅力、岳人との関わり、関川村の岳人たちの活躍をぜひご覧ください。(神田)
☆1バリツは架空の日本武術です。その正体を巡っては、「柔術」や「バーティツ」など様々に議論されています。☆2卯杖(うづえ)は正月初卯の日に、魔除け・邪気除けとして用いる杖

羽黒山麓のいでは文化記念館では実際に「金剛杖」が貸し出されています。私たちが羽黒山を訪れた際も、金剛杖を突いた方がが山頂を目指していました(写真参照)。

五鈷杵



方言一考・やつかり

「やつかり」は「一生(所)懸命に、無心に、一途に」という意味の方言だ。「躍起(やつき)になる」という「躍起」が元になつてゐると思われる。「やつかり」「たつぱり」「やつぱり」「しつかり」のように「〇〇〇〇」の形の副詞は数多くあり、それに倣つて「躍起」に「つ」が付いて使われるようになったのではないか。

「やつかり」の大御所Kさんは、暑さが緩み始めたこの頃は早朝から薄暗くなるまで荒川台の芍薬園にまた入り浸りになつてゐる。花はとうに終わつてゐるが、はびこつた草を取るのにやつきりなのだ。盛夏でも熱中症に注意しながら通つていたが、草というのは無尽蔵に生えてくる。対抗するには「やつかり」しかない。道の駅の番号調べむ「拾いもやつきり」で、喋るのもやつきりで、半端な事ができない性分らしい。現在開催している企画展「飯豊の系譜」この山と共に生きた岳人」に彼の若い頃の写真があるが、昔は登山にやつきりで、人類学者で登山家の今西錦司と多くの山に同行している。その「やつかり」が好まれた珍しい例だ。いろんな「やつかり」があつて嫌われたり好かれたりするが、草取りやゴミ拾いなら文句の言われようもない。そんな評価のされない事にやつかりになつて齡八十一の秋が始まるうとしている。(安久)



モノ・山の・佐藤又助のピッケル

開催中の企画展「飯豊の系譜」の資料の中に佐藤義和家に伝わるピッケルがある。伯父の佐藤又助(明治三十一年生)の遺品である。スイス製の名品であることと、楨有恒(まきゆうじゅう)から貰つた、といふことで関川村の岳人には有名なピッケルなのだが、その由来は良く分かっていない。展示するにあたり、又助が登山を趣味としたことや慶應大学卒である事など所有者にお聞きし、楨との接点が推測できた。楨は慶應在学中に登山部を創設したが、その三年上に又助がいる。楨は卒業後渡欧して近代登山を学び、日本に広めた人物で日本山岳会の創設者である。世界で初めてヒマラヤのマナスルに登頂した日本隊の長であり、この快挙は戦後の日本に限りない勇気と自信を与えたと言われている。マナスル遠征に際し、楨は関係者に寄付を募る手紙を送つてゐるが、その中に又助がいて、それに応じた礼としてこのピッケルを贈つたのではなかつたかと推測できる。当時ピッケルは登山家の魂とまで言われたが、重く長い木製の柄のピッケルを冬山で見かけることはなくなつた。楨の活躍、深田久弥の著作で登山ブームとなつた時代の懐かしい逸品である。(安久)

歴史館行事の報知

○夏の美術館巡り ①赤堀城跡・野口英世記念館 7月19日(土)・参加者22名 ②羽黒山五重塔・オランダせんべいファクトリー 8月2日(土)・参加者23名

○第2弾 古い映像放映会 8月23日(土) 関川村山の会会長 平田大六さんに解説していただき 飯豊縦走の記録☆「飯豊の山旅」を観賞しました。

○歴史講座① 9月24日

(水) 講師:関川村歴史文化財調査委員 佐藤忠良さん 『女川の歴史』から学ぶ

○秋の健康登山「蔵王三

9月27日(土) スタッフ・参加者27名



○古文書解説講座(7・9月) 惣代庄屋交代願い・宿場間の争いの文書を読んでいます!

お知らせ

○「飯豊の系譜」の育てられた岳人展」開催中! 会期: 12月7日(日)、10時~16時、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。

☆「飯豊の山旅」随時放映しています。

いわかがみ 第百二号
発行日 令和七年九月
編集発行 セキカワ歴史とみちの館
tel0254-64-1288 Fax0254-64-0300